



カントウータ

Cantuta

No. 65



ラパス市街と霊峰イリマニ(6438m) 撮影：風景写真家 松井 章

1. ボリビアの歴史・散策紀行 (1)
ウユニ・ラパス同伴旅行佐藤 信壽
 2. 日本人移住地訪問記(8)
ラパス:100 年を超えて受け継がれる移民の歴史松井 章
 3. 第 16 回日本—ボリビア国際医学・消化器シンポジウム 森下 鉄夫
 4. ボリビア開拓記外伝 渡邊 英樹
- コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を生き抜いた人々 14

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビア歴史・散策紀行（1）

ウユニ・ラパス同伴旅行

前ボリビア日系協会連合会事務局長

佐藤 信壽

2025年2月8日～9日にオキナワ第一移住地で行われた「国際繫生語ワークショップ 2025」に参加された方から、「ウユニ塩湖とラパスを見学したいので、案内してもらえませんか。」との連絡を頂いたので、ワークショップの後、10日から15日までウユニとラパス市内、チチカカ湖周辺を案内した。

ラパス

2025年2月10日06:30 発のBOA 便で空路ラパスへ向った。

07:30 エル・アルト空港に到着した。同行予定の方々のラパス到着予定は、14:30 なので、それまでエル・アルトを散策した。エル・アルトを散策するのは、5年振りなので、迷う事も多々あった。まず「インテル・デパルタメンタル(県際)」のバス・ターミナルに行った。施設は立派なものであった。しかし、各バス会社の窓口は、ラパスのバス・ターミナルの補助的なもののようであった。「インテル・プロビンシアル(郡際)」バス・ターミナルにも行こうと思ったが、少し離れているので、「セハ」地区の商業地区を見て歩いた。通りを占拠している露店は、どこも似ているので、現在地が分からなくなったことが数度あった。

13:30に空港に戻り、空港内の施設を見学した。

14:30 時間通り、同行の皆さんが到着した。知人であるひとり、ウユニの後、15日までラパスに滞在されるが、他の方々は12日早朝の航空便を利用されるとのことなので、空港の「荷物預り所」に荷物を預けて置き、その後、ラパス市内まで、市内バスで下り、知人と私の宿泊予定先としている「ホテル・ロサリオ」に全員の手荷物を預け、「少し気分が悪い」という人に酸素を吸ってもらい、その後、「ラパス日本人会」へ行った。

ラパス日本人会では、「日本人移住資料館」を見学させてもらい、その後、役員の方2名と懇談した後、5階の日本語クラスへ行き、施設見学をさせてもらい、渡辺康平校長と少し雑談、3階の日本食堂「はなび」で夕食を摂り、ロサリオまで35分ほど歩き、待機していたウユニ行きの小型バスに乗り込んだ。

ウユニ塩湖へ

21:10 バスでラパスを出発した。車窓からのラパスの夜景に歓声があがる。

2月11日05:40 ウユニに到着。予定よりも大分早く着いた。朝食は07:00からなので、レストラン前で休憩して時間待ちをする。

07:00～07:50 ホテル・ハルディネスのレストランで朝食を摂る。

私の携帯電話が不調となり、通信できないので、バスの運転手に、今日の塩湖観光の車両に乗り換える場所を確認してもらった。このレストランの前だということなので、そのまま待った。

観光用車両(バゴネータ/ワゴン車)2台に分乗し、まずはウユニの市内観光、ウユニ駅前で車を降り、中央公園や中央市場、駅等を歩いて見学し、コルチャニ村の土産物商店を見学し、塩湖から集めた塩を販売用の袋に詰めるまでの工程を見た。

その後、「機関車の墓場」に行った。韓国人の団体が多く来ていた。今は、雨期なので湖岸周辺を回るだけのコースだということだ。私が今までにきたのは、7月の乾期だったので雨期のコースは初めての体験となった。まず、塩湖の入り口で塩湖の平坦さと塩の白さ等を実感してもらった。ウユニ塩湖は、白亜紀末期にアフリカ大陸と分裂した、南米大陸プレートが太平洋火山帯と衝突した際の隆起と火山の噴火によって形成されたアンデス山脈の中に取り残された海水の表面が干上がって形成されたものといわれている。このため標高3,700mの湖面は平坦で、

100km 四方の標高差は 50cm 程度と調査されていて、世界屈指の平原である。

話はそれるが、サンフアン等の養鶏農家では、鶏のカルシウム強化策として、アンデスの貝殻化石を餌に混ぜていた。

その後、「ピラミッド」と呼ばれている所へ行き、岩塩で作った壁の「迷路」を通り、「ピラミッド」等の岩塩の彫刻像を見学した。

12:00 を過ぎ、昼食を用意しているというところに行った。驚いた。雨期で湖岸周辺のコースだから出来るのだろうが、真っ白な塩原の中に、天幕を張ってその下にテーブルが並べられ、各人の椅子と食器が用意され、テーブル端上に料理を入れた鍋が置いてあり、各自が好みで取り分けて食べた。飲み物としてコカ・コーラとワインも用意されていたが、高地なので「高山病」を警戒して、ワインはあまり飲まれなかった。

食後は、塩のホテルに寄り、「水場」という所に行った。生憎の天気で、雲が多く、水が少なかったが、「天空の鏡」の雰囲気は、味わってもらえたようだ。韓国人、中国人の旅行者も多く、それぞれのグループが、グループ毎の場所で写真撮影を楽しんでいた。

15:40 頃ウユニ塩湖を後にして、16:30 にコルチャニ村に戻り、ラパスへ戻るバスを待った。

17:30 バスに乗り、ラパスへ向けてウユニを出発した。

21:40 オルコで夕食休憩としたが、バイパス沿いには、これといったレストランが見えないので、市内の旧バス・ターミナルの近くに行ってもらったが、私が 10 年程前に行ったレストランは、3 軒とも閉まっていたので、「ポリョ(鶏)」の店で、フライド・チキンを食べた。

エル・アルトからラパスまでテレフェリコ体験

2 月 12 日 01:30 ラパスのエル・アルト空港に到着した。早朝 06:00 出発の 5 人の方が降車し、3 人がラパス市

内のホテルへとチェックインした。

08:30 ホテルの朝食を摂り、12:00 の便でサンタ・クルスに戻る先生を見送りがてら、エル・アルトを案内させていただくことにした。

テレフェリコ(ロープ・ウェイ)の駅に行き、テレフェリコからのラパス市内と周辺の山の眺めを楽しんでもらい、エル・アルトに着いた。エル・アルトでは、「危険区域」と言われている旨を伝え、注意してもらいながら、シャーマンの露店街を通り、露店市場の商店街を散策した。

10:30 サンタクルスへ戻る先生をタクシーに乗せ、知人を近くの別の市場に案内し、ラパスに戻り、昼食とする。昼食はチチカカ湖で獲れる魚で、「マウリ」と「イスピ」のから揚げを混ぜたものを注文した。

午後は、中井さんに「サガルナガ通り」の民芸品(土産物)店を案内した。

チチカカ湖へ

2 月 13 日 06:30 ホテルの朝食を摂り、07:30 にチェックアウトし、エル・アルトの「インテル・プロビンシアル」のバス・ターミナルへ行き、アチャカチ行きの小型バスに乗った。

09:30 アチャカチの中央公園でタクシーを 1 日貸し切りで雇い、「ペレチュコ」の手前の「イチコリヤ」辺りの眺めを案内するつもりで、10:00~19:00 までの契約で、出発した。

アチャカチを過ぎた、少し峠になったところからの「チチカカ湖」の眺めと、収穫間近い農村の眺めを案内した。

10:30 エスコマの村の入り口のガソリンスタンドで、警察の検問があり、不審尋問を受け、警察事務所に連行された。警察事務所の署長が、尋問に対応し、次のようなやりとりとなった。

「どこの国の人間だ。」

「日本人だ。」

「何しに、この辺に來たんだ。」
「この先の、ペレチュコ手前の山の眺めが好きだから、友人に見せてやりたくて來たんだ。」
「嘘をつくな。」
「嘘じゃないさ。」
「持ち物を見せろ。」
「なぜ、こんな多くの現金を持っているんだ。」
「旅行するには、現金が必要なのはわかるだろう。貴方は無銭で旅行できますか。」
「ここから先の地区は、金の産出地だ。金の不法採掘が密輸を考えているんじゃないか。」
「そんなことは考えもしなかった。それに、こんな1,000 ドルちよつとの金を買ったって儲けになると思ふのか。」
「なんのために風景を見に行くのだ。」
「風景が好きだからだ。そんなに疑わしいと思うなら、日本大使館の領事と呼ばいよだろう。」
「観光旅行なら、旅行会社の車を使う方が快適だろう。」
「貧乏人だから、安い車を使っただけだ。」
「わかりました。すみませんでした。検問も私たちの仕事なので気を悪くしないでください。」
「これでいいのですか。以前は、検問の時には、何らかの理由をつけて、罰金を要求したりしていたが、今回は何も請求しないのですか。」
「それは、昔の話です。今の警察は迷惑をかけるようなことはしません。今回も、タクシーで外国人が2人で大金を持っているというので、来てもらっただけです。これも、警察の職務なのです。了解してください。」
「判りました。それではこれで帰らせてもらいます。」
「気をつけて行ってください。さようなら。」
「さようなら。」

11:10 警察事務所を出て、車を先に進めさせた。標高4,200mの湿原の眺めを見てもらい、アポロバンバの雪

山を見て貰いたかったが、山の方は雲が立ち込めて稲光があったので、峠となるところから引き返すことにした。帰路、アチャカチの少し手前の道路脇の小高い所に登り、チチカカ湖の眺めを堪能した。

17:00 コパカバナに着き、ホテルにチェックインした。ラパスから連絡があったとのことで、宿泊票の記入や身分証明書の提示は求められなかった。

まだ、明るかったので、翌日「太陽の島」に行く船の時間を確認しに船着場まで散歩し、その辺の商店を覗いたりした。シंगाニ(500ml)がBs.15と安かったので寝酒用に買う。知人は、用心するとのことだったので、一人で部屋で晩酌とした。

2月14日 07:00 小雨だが、ホテルの朝食を摂り、船着場に行った。

08:30 船に乗ると、後から若い3人組の日本人が乗って來た。

10:00「太陽の島」に着いた。帰路は11:00に出発だということなので、島の上の方にある村まで歩いて見ることにする。息切れがするので、途中休み休み10:25まで登り、村の少し手前で折り返す、下りは9分で船着場に着いた。斜面の登りのきつい事を実感した。

島を11:00に出発し、同島のもう一つの港に遺跡見学のため20分間停泊したが、小雨も降っていたので私たちは、船の中に留まり、船から遺跡を見ていた。

12:30 船がコパカバナに戻ったので下船し、ラパス行のバスに乗る前に、ホテル代支払いのためポリビタノスを米ドルに両替した。120ドル購入し代金を聞くとBs.1,380.-とのこと、\$us.1=Bs.11.50である。サンタクルスではドルの売りでBs.11.-、買いだとBs.14.-であったので、安いと思ったら、20ドル、10ドル、5ドルの少額紙幣で持って來た。少額紙幣は、サンタクルスでも安くBs.10.-だった。しかし、ドルでの支払いに使う分なので問題が無いので、両替する。ドルを受け取った後、確認す

ると、\$us.130.-あったので、再度数え直して、店の人に間違いを伝え、数え直して「グアシス」と言った。わずかな儲けしか無いような商売なのに、こんな間違いをしているのだから困ったものだ。

再びラパスへ

午後は、ラパスに戻り、ティワナクの遺跡に行こうと思ったが、ティワナク方面は大分雨が降っているようなので、HIS 旅行社の事務所を訪問した。この際、テレフェリコの殆どの線を乗り継いで移動した。

夕食に日本食レストランに行く途中で雨が強く降ってきたので、ホテルへ戻り、ホテルで夕食とした。ホテルの食事の料金の高いのには驚いた。ピザ2つとビール小瓶2本で、26ドル(Bs.260.-/日本円だと¥5,000 相当になる)。

2月15日、知人は、午前中インターネットで仕事をするのであった。私はスマート・フォンの表面を机の角にぶつけてガード・カバーが割れたので、一人でエル・アルトを散策し、ガード・カバーを交換した。

12:15 頃から日本人会の日本語クラスでインターネットを利用した「入門クラス」と「小児クラス」の授業の進め方について私のやり方を説明したが、あまり関心が無いようなので少しがっかりしたが、私がアドバイスした、「まるごと」と、「エリンが挑戦！日本語できます」、「こどものうた」を教材研究してみますということだったので、「判らない点があればメールで質問してください」と言い残し、昼食に「ケンちゃんラーメン」に歩いて行く事にした。

大学の前の広場で、「オープン・キャンパス」を開いていた。知人の興味を引いたようだった。「ケンちゃんラーメン」に着いたが、席が塞がっているとのことで20分ほど並んで待った。後で聞くと、前日の14日が「バレンタイン・デー」で、その翌日が土曜日なので、昼の時間帯が混んでいたのだということだった。

知人は、翌日16日の早朝の便で出発されるということなので、ホテルのフロントにタクシーを頼み、部屋に戻った。

見送りは必要もないので、シンガニーを飲み、ウトウトしていると22:00頃フロントから電話があり、友人が来ているというのでロビーに下りるとHIS旅行社の小川君が来ていて「旅行はどうでしたか」と聞いたので、「皆、喜んでいただよ」と話し、ウユニのこの時期のサービスや、エスコマで警察の不審尋問を受けたこと等を雑談した。気にかけてくれたことに感謝。30分ぐらい雑談の後、彼を帰して部屋に戻り飲み直した。

2月16日04:00頃、知人から「無事に空港に到着した」旨のメッセージがあり、それを見て、再度飲み直して、寝直した。

07:30朝食を摂り、その後「青空文庫」を読み、10:30にホテルをチェックアウトした。

12:00 発のサンタクルス直通のバスに乗り、2月17日07:40 無事サンタクルスに帰着した。

(終わり)

2. 日本人移住地訪問記（8）

ラパス:100年を超えて受け継がれる

日系社会

風景写真家 松井 章

▼ラパス日本人会でお出迎えくださった皆様



左から、野田エリアナ・ミドリさん、南雲謙太郎さん、秦カルメン美津子さん、西澤サンティアゴ篤路さん

2025年6月、高原都市ラパスで「ラパス日本人会」を訪問しました。1922年に設立された同会は、100年以上にわたり、ボリビアに暮らす日本人・日系人の交流や相互扶助、日本文化の継承を支えてきました。

ボリビアの日系社会というと、サンタクルス県のオキナワ移住地やサンファン移住地を思い浮かべる方が多いかもしれません。しかし今回、ラパスの日系人のお話を聞くうちに、それだけではボリビアの日系史を語ることはできないと、改めて感じました。

標高約3700mにある高原都市ラパスには、農業移住地とは異なる形で形成されてきた、100年以上も続くもう一つの日系社会の歴史があります。

ラパス日本人会に着き、館内のレストランを見ると、約30年前にここで鰯の刺身丼を食べたことを思い出しました。印象としては、当時とほとんど変わっていないように感じました。

▼ラパス日本人会の展示コーナー「日系人ってなに？」



ラパス日本人会の事務所に入ると、ラパスで長く活躍する日系人の皆様がお出迎えくださいました。会長の秦カルメン美津子さん、野田エリアナ・ミドリさん、小森ディエゴ豪さん、西澤サンティアゴ篤路さん、南雲謙太郎さん

一人ひとりのお話を聞いていくと、同じ「日系人」であっても、それぞれの家族がたどってきた道は大きく異なっていました。現在、ラパス日本人会の会長を務める秦カルメン美津子さんのご両親は、ラパスでお見合いをして結婚しました。父親はラパスでヤマハの楽器を扱う店を営み、それが後のヤマハ・ボリビア、現在の「ヤマボレ」へとつながっていきました。

小森ディエゴ豪さんはラパス生まれです。両親は一世と二世の間に位置する日系人でしたが、ディエゴさん自身は国籍に関する問題から、8歳になるまで無国籍の状態だったといいます。

野田エリアナ・ミドリさんは、祖父が日本人、祖母がペルー人で、その次の世代となる両親はボリビア人です。日本、ペルー、ボリビアという複数の国につながる家族史を持つ日系人です。

南雲謙太郎さんは長崎県の軍艦島で生まれ、両親とともにサンファン移住地へ渡ったことが、ボリビアでの生活の始まりでした。

こうした一人ひとりの背景を聞いた後、興味深い問いを投げかけられました。

「松井さんは、“日系人”という言葉はどういう意味で使っていますか」

私は、日本から南米などへ移住した人々と、その子孫というイメージを持っていました。話を聞くと、「移住」を基準として、日本から移住した本人を一世、現地で生まれた子どもを二世、その次を三世と考えるそうです。

ところが、実際の人生はそれほど単純ではありません。母親側から見れば一世、父親側から見れば三世という人もいます。「そういう場合は二世ですか」「1.5世かな」と笑いながら交わされた会話が印象に残りました。

世代が進めば、日本との距離も少しずつ変化していきます。一方、日本で生まれても何十年もボリビアで暮らせば、考え方や感覚はボリビア社会の影響を強く受けます。「日本へ行くと、自分はもう完全な日本人ではないと感じることもある」という言葉も聞きました。

日系人という言葉は、単に血筋や世代を数字で区切るだけでは説明しきれません。そこには、日本とボリビア、二つの文化の間を生きてきた一人ひとりの歴史があります。

▼ラパス日本人会の展示コーナー

「ボリビア日本人移住者の足跡」



日本人がボリビアへ入るようになったのは19世紀末にさかのぼります。1899年、ペルーのカヤオ港に到着した日本人契約移民の中から、その後ボリビアへ移ってきた人

々がいました。ペルー南部からプーノ、チチカカ湖周辺を経て、アンデスを越えてボリビアへ入り、ソラタなどラパス県各地へ広がっていったといひます。

そして1922年、31人の日本人によって「ラパス日本人会」が設立されました。興味深かったのは、その設立目的です。会員や日本人同士の結束だけでなく、「国籍を問わず、個人や団体との親睦を図る」という考えが、100年以上前から掲げられていたそうです。

▼険しい斜面にも家々が張り付くように立ち並ぶ



その後、日本人社会は急速に成長し、1930年頃にはラパス日本人会の会員は約300人に達しました。当時は日系社会の「黄金時代」ともいえる時期で、商業の世界で成功した日本人も多くいました。工場を経営した人、日本企業とボリビアを結びつけた人、行政や金融の世界で活躍した日系人もいたそうです。

ラパスの日系社会の特徴は、戦後に建設されたオキナワ移住地やサンファン移住地とは、その成り立ちが大きく異なることです。サンタクルスの日本人移住地は、日本とボリビア両政府による計画移住として形成されました。

一方、ラパスの日系社会は、それ以前から個人の判断でこの地へやって来た人々が、商売を始め、自分たちで日本人会を組織し、助け合いながら築いてきました。日本政府から十分な支援を受けられない中、自分たちの力でボリビア社会に根を張っていったのです。その過程で、生

活の基盤をボリビアに置き、ボリビア国籍を選んだ人も多くいました。

「日本人は働き者で、約束を守り、責任感がある」
ラパスで暮らした日本人たちが築いたこうした評価が、戦後、日本人農業移住者を受け入れる際の信用にもつながったのではないかと、という話も聞きました。

▼サガルナガ通り



戦争で断ち切られた日系社会

しかし、ラパスの日系社会がそのまま順調に発展していたわけではありません。第二次世界大戦が始まると、状況は一変しました。ボリビア国内でも日本人に対する圧力が強まり、一部の日本人はアメリカの強制収容所へ送られました。

秦カルメン美津子さんの父親も、身の危険を避けるため、しばらく地方に身を隠して暮らしていた時期があったそうです。遠く離れた日本とアメリカの戦争が、ボリビアで暮らしていた日本人一人ひとりの生活にまで直接影響を与えていました。戦争は、ラパスで築かれつつあった日本人社会を大きく揺さぶりました。しかし戦後、日本人会では再び活動を始め、次の世代へとつながっていきます。

サンファン移住地の厳しい出発

この日、特に印象に残ったのが、サンファン移住地出身の西澤サンティアゴさんの話でした。計画移住と聞けば、日本政府の支援を受けながら整然と新天地を開いていっ

たような印象を持つかもしれませんが、当事者から聞く現実には、ずっと厳しいものでした。「最初から十分に支援されていたわけではないんです」

西澤さんによれば、サンファンに入植した人々のうち、最終的には約3分の2が移住地を離れたそうです。日本へ戻った人もいれば、ブラジルやアルゼンチンへ移った人もいました。初期には食料にも事欠き、何週間もトウモロコシを焼いて食べ、それでしのいだ若者もいたといいます。西澤さんの母親は、最初期の「西川移民」のグループでサンファンへ入りました。父親はその数年後、移住協定後のグループとして入植し、二人はサンファンで出会い、結婚しました。

当初、ボリビア政府から一世帯あたり約50ヘクタールの土地が与えられたそうです。その後、移住地を去る人々の土地を残った家族が買い取り、農地を広げていきました。そうした苦難を経て、サンファンはボリビアの農業に大きく貢献する地域へと成長しました。米や鶏卵などの生産で重要な役割を担い、一時期はボリビアで流通する卵のかかなりの割合がサンファンから供給されていたといいます。

成功した現在だけを見ていると、その背後にあった長い試行錯誤や、移住地を去っていった人々の存在を忘れてしまいます。今回の取材で、移住史とは成功者だけの歴史ではないことを強く感じました。

1962年にサンファンで生まれた西澤さんは、20歳頃にラパスへ移り、大学を卒業しました。その後、JICAの研修制度を利用して日本へ留学し、中央大学大学院で修士号を取得しました。現在は弁護士として活動する一方、ボリビアの銀行の取締役も務めています。その銀行では、7人の取締役のうち西澤さんを含む2人が日系人で、さらに監査役にも日系人がいるそうです。

移住者の子どもとして生まれた日系人たちは、親の仕事をそのまま受け継ぐだけではありません。教育を受け、専門職や企業経営、行政などへ活動の場を広げ、ボリビア

社会の一員として新しい役割を担っています。

▼ラパス日本人会の活動紹介パネル



一方、ラパス日本人会では、日本語学校、運動会、野球、テニス、盆踊り、カラオケ大会など、長年にわたってさまざまな活動が続けられてきました。孤児を支援する施設を運営した時代もあり、創立50周年には会員たちが日本庭園を造り、ラパス市へ寄贈したそうです。現在も日本語学校は日本人会館で続いています。また2005年に始まった「日本祭り」は規模を拡大し、多くのボリビア人が日本文化に触れる場となっています。

北部のアマゾン地域に移住した初期の日本人たちは、「シリング」と呼ばれるゴムの木から樹液を採る仕事に従事していました。その後、ゴム景気が終わると、ラパスなどの都市へ移住した人も多くいました。都市で商売を始めた人、アマゾンに残って働き続けた人。話を聞けば聞くほど、「ボリビアの日系人」という一つの言葉の中に、実に多様な人生があることが分かってきます。

ラパス日本人会の方が、こんな言葉を口にしました。

「どの町にも、それぞれの歴史があります」

まさにその通りだと思います。ラパスにはラパスの歴史があり、リベラルタ、コチャバンバ、そしてサンタクルスのサンファン移住地やオキナワ移住地にも、それぞれ異なる日系人の歴史があります。

今回の訪問で見てきたのは、「日本人がボリビアへ移住した」という一本の歴史ではなく、一人ひとりの選択と

人生が幾重にも重なり合い、現在の日系社会につながっている姿でした。

▼ラパス日本人会の長い歴史をまとめた貴重な記録



▼今では、ロープウェイ「テレフェリコ」が市民の重要な足となっている



100年以上にわたって受け継がれてきたラパス日本人会。その歴史は、過去を保存するだけのものではありません。日本とボリビア、二つの社会をつなぎながら、今も日系人とともに歩み続けています。

(つづく)

3. 第16回日本—ボリビア国際医学・ 消化器シンポジウム

一般社団法人日本ボリビア協会 副会長
特定非営利活動法人日本—ボリビア医療友好協会
理事長 森下 鉄夫

要旨:

● 第16回日本—ボリビア国際医学・消化器シンポジウムが2025年10月2日・3日にボリビアのサンタ・クルス・デ・ラ・シエラ(サンタクルス)のボリビアキリスト教大学(UCEBOL)で開催された。

● 346名のボリビア人医療関係者が出席し、第1回シンポジウム(1982年)より他国の医師も含め述べ5,703名の医療関係者が参加された。

● 日本人医師7名とボリビア人医師4名が消化器疾患、口腔疾患、脊髄疾患などにつき講演された。

● 番外プログラムとして会場で茶のお点前が披露・解説され、抹茶がふるまわれた。折り紙も披露され、日本側の答礼レセプションでは浴衣の着付けが行われた。

第16回日本—ボリビア国際医学・消化器シンポジウム(XVISimposio Internacional Boliviano-Japonés de Medicina y Gastroenterología)が、昨年(2025年)10月2日・3日にボリビアのサンタクルス・デ・ラ・シエラ(サンタクルス)で、日本—ボリビア医療友好協会とボリビアキリスト教大学(Universidad Cristiana de Bolivia, UCEBOL)の共同主催のもとで開催されました。

今回のシンポジウムは、ボリビア側会長をUCEBOL学長のDr. Soo Hyun Chung、事務局長をUCEBOL医学部長のDr. Jorge Nakamura Kina、事務局次長をDr. Sayuri Igarashi Cuellarが務められ、日本側会長を森下、副会長を細江直樹先生(慶應義塾大学医学部予防医療センター教授)が務めました。

Dr. Nakamuraは慶應義塾大学医学部整形外科に留学していました。

私どもはニューヨーク、サンパウロ経由でサンタクルスに向かいましたが、ニューヨーク発サンパウロ行きのユナイテッド航空便が突然欠航となり(欠航理由は発表なく不明)、ニューヨークそしてサンパウロに泊まる羽目になり、まる1日遅れて10月2日15時50分にサンタクルスに到着しました。

直ちにシンポジウム会場に参りました。講演順が一部変更され、シンポジウムは滞りなく進行していました。



写真3-1 UCEBOLの大学講堂でのシンポジウム

シンポジウムはUCEBOLの大学講堂(paraninfo)で行われ(写真1)、スクレ消化器病学会会長Dra. Yanet Lijeron Casanovas(Professor of Medicine at San Simon University of Chuquisaca)をはじめ2日間に延べ346名の医師・医学生・医療関係者が参加されました。



写真3-2 参加した医師、医学生、医療関係者346名

シンポジウムでは日本人医師7名とボリビア人医師4名が講演されました。(写真3)。講演は日本人医師により閉塞性大腸癌に対するステント療法・経鼻減圧療法・緊急手術、周術期口腔管理、予防医療における内視鏡検査、緑茶のポリフェノール・カテキン・タンニンについて、Peutz-Jeghers症候群(遺伝性の消化管多発ポリープ)、脊髄損傷のボツリヌストキシンによる治療・リハビリテーションが、ボリビア人医師により小腸内細菌増殖症、肝臓造影法、Bouveret症候群(胆石性腸閉塞)、シャーガス病による巨大結腸症の外科的治療など各30～60分間行われました。日本人医師は英語で行いスペイン語に逐次通訳され、ボリビア人医師はスペイン語で行いスライド内容はグーグルレンズを用い日本語に翻訳されました。



写真3-3 講演(山内智博先生)

さらに唐澤直子先生(千葉大学医学部循環器内科・浦安ふじみクリニック)の御発案で茶道についての講演に引き続き、番外プログラムとして山内智博先生(東京都立駒込病院歯科口腔外科部長)の奥様の裕美様とともに会場で茶のお点前を披露・解説し抹茶がふるまわれ、実況中継されました(写真4)。世界的な抹茶ブームのためか抹茶を味わいたいと希望者が殺到しました。さらに遠藤俊吾先生(福島県立医科大学会津医療センター消化器外科教授)の奥様の里江様より折り紙も披露され、皆様は日本文化をおおいに堪能されました。



写真3-4 抹茶を点て希望者にふるまわれ、実況中継された(唐澤直子先生、山内裕美様)

シンポジウムには前述のごとく346名のボリビア人医師・医学生・医療関係者が出席されました。第1回(1962年)から第16回シンポジウムまで延べ228名の日本人医師、1名の日本人看護師、5,153名のボリビア人医師・医学生・医療関係者、297名の他国の医師、24名のボリビア人看護師と合計5,703名の関係者が参加されました。

2日には到着早々、大学側がLos Hierrosで歓迎会を催してくださり、チュラスコ料理をいただきましたが(写真5)、3日には日本側による答礼レセプションがSwiss hotelで行われました。日本の養殖技術の指導によるチチカカ湖の虹鱒のゼリー寄せもふるまわれ、感謝状や記念品の贈呈など和気藹々と楽しい一時を過ごすことができました(写真6)。唐澤先生ご指導のもと浴衣の着付けも行われました(写真7)。



写真3-5 ボリビア側による歓迎懇親会ではチュラスコ料理



写真3-6 日本側による答礼レセプション。感謝状や記念品が贈呈された



写真3-7 答礼レセプションでは着付けも行われ、浴衣姿のClaudia様とご主人のDr.Jorge Nakamura

Dr. Chung、そしてシンポジウムの準備・実行から滞在中のお世話までしてくださいました。Dr. Nakamura, Dra. Igarashi, Dr. Jorge Kazuo Inoue、御講演くださいました細江直樹先生、遠藤俊吾先生、竜崇正先生(千葉県がんセンター前センター長・浦安ふじみクリニック院長)、唐澤直子先生、山内智博先生、Dr.Kenji Limpas Kamiya(慶應義塾大学医学部消化器内科)、Dra. Lijeron, Dr. Celia Yucra (Gastroenterology, Residency teacher, Caja Petrolera de Salud),

Dr. Marcelo Ronald Casas Mayta, (Professor of Medicine at UCEBOL) Dr. Jorge Emilio Aliaga Matienzo(Professor of Medicine at UCEBOL)に深謝申し上げます。

私たちは打ち解けた雰囲気のもとに国際友好を楽しみながら当シンポジウムを、消化器のみならず基礎・臨床医学の各領域、さらには看護領域やコメディカル領域も含めた学際的学術集会、および若手医療者の教育集会へ発展させることを目指しています。既に消化器病学に加え、微小循環学、微生物学、感染症学、熱帯医学・寄生虫学、医化学、循環器内科、小児科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、呼吸器科、腫瘍学、総合医学、予防医学、歯科・口腔外科、看護学、医療系コンピュータテクノロジー領域の先生方が御講演くださっています。

このシンポジウムが医学・医療を通して日本とボリビアおよび南米との友好・親善・協力に少しでもお役に立てればと願っています。

(特定非営利活動法人日本-ボリビア協会ホームページ
<http://www.nippon-bolivia-iryo-yuuko.jp>)

参考文献：(W Waves：日本癌病態治療研究会誌)

- 1) 森下鉄夫:日本・ボリビア医療友好協会．W Waves、9:26-27,2003
- 2) Morishita T. : Non profit organization Japan-Bolivia association for medicine and friendship, W Waves, 14:102-103,2008
- 3) 森下鉄夫:第9回日本-ボリビア消化器国際シンポジウムと第30回パンアメリカン消化器病学会特別シンポジウム, W Waves, 13:24-25,2007
- 4) 森下鉄夫:第10回記念日本-ボリビア消化器国際シンポジウム, W Wave17:34-35,2011
- 5) 森下鉄夫:第11回日本-ボリビア国際消化器シンポジウム, W Waves, 19:51-52, 2013
- 6) 森下鉄夫:第12回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム, W Waves, 22:21-22,2016.
- 7) 森下鉄夫:第13回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム, W Waves, 25:28-30,2019
- 8) 森下鉄夫:第14回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム, W Waves, 27:26-28,2021

4. ボリビア開拓記外伝

コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を
生き抜いた人々 14

一般社団法人日本ボリビア協会

相談役 渡邊 英樹

けいえいこもん きょうぞう
「経営顧問」という虚像じぎょうとうじしゃ わたし
事業当事者でもない私が、なぜここまでやらなければ

いけなかつたか。そしてなぜやり遂げることができたか。

りゆう わたし かたが
その理由はCAICOが私につけてくれた肩書きけいえいこもん
「経営顧問・Asesor administrativo」にあった。はってんとじょうこく せんしんこく
発展途上国では、さまざまなプロジェクトが先進国のしえん おこな おお ばあい せんしんこく
支援で行われることが多い。その場合、先進国からはけん ぎじゅつかんりよう しどうかんとく
派遣されたテクノクラート(技術官僚)が指導監督をしてぎょうむ すいこう とき けつていけん も
業務が遂行される。このような時、決定権を持つのは「こもん かたが も
顧問などの肩書きを持ったテクノクラートとなる。こもん にほん だいいっせん げんえき しりぞ ひと めいよしよく
「顧問」は日本だと第一線の現役を退いた人に名誉職めいしよう ふ よ おお
の名称として付与することが多い。しかし、ここボリビちが たいへん じゅうせき けんげん も やくしよく
アでは違っていた。大変な重責と権限を持つ役職としにんしき
て認識される。わたし たちば う と
CAICOにおける私の立場もそう受け取られたのだ。き あと まつ
そのことに気づいたときには、後の祭りであった。これまでけいざいだんたい こうどう
で、経済団体らしい行動をしてこなかったコロニアオキめんかじぎょう の だ にほんせいふ
ナワが綿花事業に乗り出した。それには、日本政府のしきん とうにゅう ゆうし せきにんしゃ けいえい
資金も投入されている。その融資の責任者が「経営こもん しゅっこう げんち ひとびと
顧問」としてCAICOに出向している。現地の人々は「けつていけん こもん かって おも せつしよく
決定権があるのは顧問だと勝手に思って接触してきた

。

たいへん おも げんち ひと
「大変なことになった」と思った。現地の人ばかりではひとびと せんぜん
ない。オキナワの人々でさえもそうであった。戦前にアさんみやく こ はい しゅうせんご おきなわ
ンデス山脈を越えてボリビアに入り、終戦後は「沖縄せんさいきゅうさいかい おきなわむらけんせつこうそう しゅう
戦災救済会」や「沖縄村建設構想」の主要メンバーであらかきようえい ちゃ いくど まね
あった新垣庸英さんがお茶に幾度か招いてくださったがわか ぎわ かなら わたし ちから
、別れ際には必ず「私たちには、もうまったく力があり

ません。どうかコロニアのことをよろしくお願いします」と

い まね しんい
言われた。お招きの真意がそこにあった。しやだい りゅうきゅうせいふ ちゅうざいじ むしやちよう
また、初代の琉球政府ボリビア駐在事務所長であいじゅちようき じぶん のうじよう と
った伊集朝規さんもご自分の農場で採れたパパイアやたずさ こ ようえい おな い
カカオを携えて来られて、庸英さんと同じことを言ってかえ わたし なに ちから ごかい
帰られた。私に何か力があると誤解されているようせすじ さむ
で「えらいことになった」と背筋が寒くなった。いつけん なまいき わかどう きのう
ドン・ホセとの一件から「生意気な若造」との昨日までひょうか いってん いじゅうち わかもの
の評価が一転して「移住地をどうかしてくれそうな若者」きょうぞう ひとりある はじ しっぱい
という虚像になり、それが一人歩きを始めた。失敗すれうんめい じじつ まん いち
ば、スケープゴートにされる運命となった。事実「万が一しっぱい しば うし ひ いじゅうちじゅう
、失敗したらワタナベを縛って牛に引かして移住地中をひ まわ い ひと じぎょう
引き回してやる」と言っている人がいると、オキナワ事業しよ ほうこく う
所から報告を受けていた。やっかい じぶん せいかく
しかし、もっと厄介なのは、自分の性格であった。そうきょうぞう てつていてき なん
までいわれるなら、その虚像で徹底的に何でもやってやはら
ろうと腹をくくった。ぎんこう こうしょう
ブラジル銀行との交渉かわい べいこくゆしゅつにゆうぎんこう
ドン・ホセことホセ河合さんから米国輸出入銀行へのこじんほしように と つ
個人保証を取り付けたことによって、コロニアオキナワのうぼくそうごうくみあい ゆにゅう せいしき
農牧総合組合(CAICO)は、プラントの輸入を正式にはっちゅう こじんほしように じょうけん
発注することができた。ドン・ホセの個人保証の条件は

はっちゅうご ぎんこう ほしやう さ か
、プラントの発注後にブラジル銀行の保証と差し替える
ことだった。__ このため、私 たちは直ちに、ブラジル
ぎんこう してん せつしやう かいし さいしや
銀行サンタクルス支店と折 衝を開始した。最初はスペ
ご たんのう じん つうやく どうはん
イン語の堪能な人に通訳として同伴してもらっていたが
つうやく じぎやう ぜんたいざう しきん ぐ など せいづう
、通訳は、事業の全体像とか、資金繰り等に精通してい
もんどう うわ つら すべ き
るわけではないので、問答が上っ面を滑ってしまう気が
あいて かん
した。相手もそう感じていたようだった。
とき してんちやう こんど り あそ き
ある時、支店長から、「今度、1人で遊びに来てくれ」と
い あと り にっさん わたし
言われ、その後は1人で日参するようになった。私のス
ご さいしや せんせい わ や
ペイン語の最初の先生は、我家から200^レほどの
じぎやうだんじむしよ ある どお とちゆう
事業団事務所歩いていくラ・リーバ通りの途中の50^レ
はな す
くらいしか離れていないところに住んでいたニェッカ・ロ
じやう
ッカ嬢であった。



写真4-1 スペイン語の先生(1970年筆者撮影)

にんぎやう い み しゆくしやうけい
ニェッカとは人形を意味するムニェッカの縮小形で
あるが、ニェッカと言えば彼女のことと街中で通ずるほど
ゆうめい だいひやう こうほしや
に有名だった。ミス・インターナショナル代表の候補者の
り し ひと かぞく つ
1人だったので知らない人はいなかった。家族ぐるみの付
あ こじん う
き合いもして個人レッスンも受けていたが、なかなか
じやうたつ
上達はしない。

へ た ご つぎ つぎ かね か
「よくも、その下手なスペイン語で次から次へと金を借
りまくってくるなあ」と海外移住事業団の同僚の
あにやあきら
安仁屋晶さんからは、こうあきれていた。
じつ じぶん へ た
実は、コツがあったのである。自分の下手なスペイン
ご かんじやうかもく すべ ご
語をカバーするために勘定科目の全てをスペイン語で
てっていき おぼ ぎんこう てつかく しゆうきやう
徹底的に覚えたのである。銀行では、哲学や宗教の
ちゆうしやうてき はなし けいかくひやう
抽象的な話をするわけではない。計画表という
ぐたいてきすうじ まえ はなし
具体的数字を前にしての話である。

ぎんこう りゆう ご はな
しかも、銀行は、どんなに流ちょうなスペイン語で話し
へいしんていとう じぎやう み こ
ても、平身低頭してみせても、その事業に見込みがな
ぜったい かね か たす
ったら絶対にお金を貸さない。「助けてください」などと
い ばんじきゆう じぎやう かくじつせい
言おうものなら「万事休す」である。事業の確実性と
しきんけいかく もんだい すうじ つか
資金計画に問題がないことをきちんと数字を使って
せつめい ごかい まね おそ
説明すればよかったのである。誤解を招く恐れがない
らく い らく
ので、楽と言えば楽なのであった。

じん してんちやう ご まじ
ブラジル人の支店長は、ポルトガル語を交えてのスペ
ご わたし へ た ご
イン語で、私は下手なスペイン語でどうにかなった。
してんちやう せき うし い
支店長の席のすぐ後ろには、ポットに入れたコーヒーが
の ちい
あり、ぐい飲みくらいの小さいコーヒーカップがいづつも
ふ してんちやうみずか さとう
伏せてあり、支店長 自らそのカップにタッブリと砂糖を
い こ そそ
入れて濃いコーヒーを注いでくれた。これがブラジル
めいぶつ なが はなし とき
名物のカフェジニーニョである。長い話になった時には
はい の
5杯くらいは飲んだ。

ほんにん ふあん おも じぎやう たにん かね
本人が不安に思っている事業に、他人さまは、お金を
だ おも せつめい さいご むね は
出さないと考えたから、説明した最後には胸を張って
ひと もんだい
「No hay ningun problema!」「何一つ問題はない」と
い
言った。

なに いちばんたいせつ
そして何より一番大切なことは、コロニアオキナワの
しょうらいせい みと か き
将来性を認めてもらうことだった。バスを貸し切ってブ

ラジル銀行の支店長から守衛まで総勢60人ほどをガイ
ト役で案内して、コロニアに向かい、現地でCAICOの
役員全員出席しての昼食会を開いてもらい相互の
交流を図った。コロニア出身のオスカル為泰長嶺さ
んもブラジル銀行の一員として参加してくれて、私の
下手なスペイン語のガイドを助けてくれた。

こういう催しとなるとウチナーンチュはお手のものだったから大成功であった。言葉は十分に通じなくても、ウチナーンチュの「イチャリパチョーデー」の気持ちは十分に通じた。「ユイマール」の精神も感じとってくれたと確信できた。サンパアン移住地から取り寄せたポンカンのカゴに入れて一人一人にお土産として帰りのバスに乗ってもらった。そのバスの中は、にぎやかな最高に楽しいものになった。

それからは、私は支店長の部屋にフリーパスとなった。さらに、幸運にもブラジル銀行の後任の支店長に沖縄県系人のジュリオ大城さんが赴任して来た。彼はブラジルのカンポグランデの出身だった。このカンポグランデの沖縄県人も先の大戦の大きな犠牲者である。

ブラジルの沖合で、同国の船がドイツの潜水艦に沈没させられるという事件が起きた。沿岸の枢軸国側の住人はスパイと疑いをかけられたのである。アメリカから強制退去の法案が送られて来て、サントス港近くに住んでいた日本人585家族は一夜のうちに有無を言わず強制退去させられた。

「スパイ野郎」とさげすまれたという。最初はサンパウロの移民収容所に送られたが、その後、ボリビアの国境に近いマツグロッソ州のバルゼア・ア

レグレの奥地へと移送された。

その州都がカンポグランデである。その585家族の6割が沖縄県人であった。ボリビアに移住する沖縄県人が乗った列車がカンポグランデに停車した時には、その度ごとに、県人の炊き出しの支援を受けている。

そんな奥地からサンパウロ大学を出て、ブラジル銀行に入行したのであるから、ジュリオ大城さんは、とんでもない秀才であったに違いない。

子供が同じ年頃であったから、家族ぐるみの付き合いとなり、お互いの家をよく行き来した。おそらく、彼が全ての書類を整えて本店に送ってくれていたのであろう。ブラジル銀行特有の支店長の1カ月休暇で大城さんが不在となったが、代わりの支店長が来て、すぐに保証の承諾をもらえたのである。さすが、超エリート。やる事が違うと感心した。

全てをぜんだととのけていほかしてんちょうまか全体的お膳立てを整えて、決定は他の支店長に任せて、同胞に対する情実案件と見なされるのを回避したに違いないと思った。

大城さんは、その後、サンタクルス支店長から開設したばかりのブラジル銀行東京支店長に栄転した。同じサンタクルス支店にいたコロニア出身の長嶺さんもしばらくして東京支店勤務となってボリビアを離れていった。こうして約5カ月間に及ぶ障害物競走のようなタフな交渉を終えることができた。何よりもドン・ホセとの「保証の差し替え」の約束が果たされたことがうれしかった。

事業団からの融資を受けるためにCAICOの見せかけの自己資金としてドン・ホセから借りた「無利子、無担保、無期限」の4万ドルは、後に、サンタクルス市郊外の「沖縄

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

れんごうかい しよゆう とち だいぶつべんさい
連合会が所有する土地で代物弁済をした。それは、
りゅうきゅういじゅうこうしゃじだい けいかく じつげん み さくゆ
琉球移住公社時代に計画して実現を見なかった搾油
こうじょうようち
工場用地であった。
どうし いちじる はってん とち こうとう まね おんけい
同市の著しい発展が、土地の高騰を招き、その恩恵
へんさい せつりつじてん
で返済できたのである。とにかく、CAICOの設立時点
しゅっしきん かいむ
では、コロニアからの出資金は皆無であったから、ホセ
かわい ぜんい じじつ えいえん
河合さんの善意だけでスタートできたという事実は永遠
きおく
に記憶にとどめておきたい。

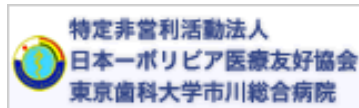
かわい すこ ふ
ここで、ホセ・河合さんについて少し触れておきたい。
かわい せい せんぜん かわい ちちおや
河合さんはペルー2世である。戦前は河合さんの父親
か ぐ こうじょう けいえい せいかつ ゆた
がペルーで家具工場を経営していて、生活は豊かだっ
き こども ころ ははおや
たと聞いた。ドン・ホセは子供の頃、母親がむっきりなしに
がっこう よ だ い そうとう
学校に呼び出されていたと言っていたので相当なヤンチ
やであったらしい。

ちちおや しゅっしんち ぎ ふ けん しようぎょうがっこう べんきょう
父親の出身地である岐阜県の商業学校で勉強して
かえ こうかいじょう たいへいようせんそう はじ
ペルーへの帰りの航海上で太平洋戦争が始まった
こう つ とき にほんぐん み
めカヤオ港に着いた時には、日本軍のスパイと見なされ
そくとうごく かた せんご しんせき
て即投獄されたと語ってくれた。戦後、ボリビアの親戚を
たよ き じぎょう はじ せいこう かた
頼ってラパスに来て事業を始めて成功した方であった。

編集部

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2026

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
All rights Reserved